

早稲田大学博士論文(概要)		
2006	学位記	文科省報告
	4413	(甲) 乙 2247

論文概要

楚地出土簡帛による戦国楚の文化・習俗の研究―子弹庫楚帛書群を中心に―

森和



本研究は、長江中流域を中心とする戦国楚の領域「楚地」から出土した簡帛資料の分析を通じて、「巫鬼を信じ、淫祀を重んず」（『漢書』地理志下）・「荆人は鬼を畏る」（『呂氏春秋』孟冬紀・異宝篇）などと表現された戦国楚の文化・習俗を明らかにしようとするものである。このような分野の研究は、伝世の文献史料に関連する記述が少なく、また断片的でもあるため、一九七〇年以降に本格的に出土するようになった戦国・秦漢時代の簡牘・帛書が必要不可欠な一次史料となっている。その代表的なものとして湖北省江陵地区の戦国楚墓から出土する「卜筮祭祷簡」と呼ばれる占卜・祭祀の記録と、楚地の秦墓・漢墓を中心として出土する「日書」と呼ばれる占卜書があり、それらによる研究はすでに相当の成果を挙げている。しかし、これらの楚地出土簡帛と同じように戦国楚墓から出土し、内容的にも占卜や祭祀などに関わる記述があるなど共通性が認められながら、楚地の文化・習俗の研究に十分に活用されてきたとは言い難い資料がある。それが、本研究において基本史料として採り挙げた「子弹庫楚帛書群」である。この楚帛書群は一九四二年九月に湖南省長沙市の戦国楚墓から盗掘によって出土した資料で、「楚帛書（あるいは楚繒書）」と通称される唯一ほぼ完整な状態の帛書と、それに重ね書きされていた別の帛書の痕跡である「第二帛書」、そしてこれらと同じ竹筭に収められていた複数の帛書の断片である「残帛書」の三種類に大別される。その資料の状態および情報量から、本研究では「楚帛書」の分析を基軸にし、その過程で抽出される種々の特徴を「卜筮祭祷簡」や「日書」などの楚地出土簡帛と比較検討し、それによって戦国楚の文化・習俗を浮かび上がらせて考察した。本研究の構成と、各章で検討考察した内容の概要は以下のごとくである。

序章「子弹庫楚帛書群をめぐる研究史と問題の所在」

子弹庫楚帛書群は、解放以前の日中戦争下に盗掘により出土し、その数年後に大部分がアメリカに流出したために出土時期や墓葬の位置などに諸説あり、考古資料として根本的な問題を抱えていた。現在、その問題は李零氏の中国・アメリカでの調査や陳松長氏の関連文書の調査などによっておよそ克服されており、序章ではまず、

それらの成果に基づき、楚帛書群の出土状況および流伝経緯を整理した。次に、楚帛書群が出土した子彈庫楚墓は、一九七三五月に盗掘者の先導で補完的な科学発掘が行われているため、その発掘簡報および長沙で発掘された二千基以上の楚墓について整理した総合報告書のデータに拠って楚帛書群の考古学的情報を整理した。このような資料としての基本的情報を踏まえた上で、これまでの研究史を概括して問題点を次のように指摘した。従来の研究において、楚帛書は語句や内容の一部が一致あるいは類似する传世文献および一九八〇年後半以降に増加する楚簡の記述をベースにして断章取義的に別個に解釈されてきたが、そのような方法では多彩な要素が含まれる楚帛書の全体像を把握することは困難である、と。そこで、传世文献や楚地出土簡帛によって構築された楚の文化・習俗に関する既知の枠組みから楚帛書の種々の要素を個別に捉えるのではなく、楚帛書の原文そのものに即して各要素を解釈し、そこから楚の文化・習俗がどのように見えてくるのか、それが他の史料によって知られる楚の文化・習俗とどのように関係するのか、という本研究の方向性を提示し、各章の内容の概略を示した。

第一章「楚帛書三篇の論理的結合とその史料性格」

楚帛書については、一九四五年に最初の研究書である『晚周繪書考証』が刊行されて以来、半世紀以上の研究蓄積があり、様々な角度からのアプローチがなされてきた。しかし、その特殊な構成と多彩でかつ固有性に富む内容のため、見解の定まらない問題も少なくなく、特にその史料性格をめぐっては諸説紛々としている。それら諸説の相違は、楚帛書を構成する八行文・十三行文・辺文の三篇のどの篇に重心を置くかによって生じていると見做し得るが、それでは楚帛書の総体的な史料性格を把握しているとは言いがたい。より本質的な問題は、三篇がどのような関係にあるのか、その論理的結合にあると考えられる。そこで第一章では、三篇を通読して各篇の論理的結合を明らかにし、「日書」との比較分析を通して、楚帛書が数術関連資料の中でどのように位置づけられるのか、その史料性格について考察した。それによれば、楚帛書は、鬲戲・四神・炎帝・祝融・共工という神々によって時間と空間という二つの秩序が形成され、炎帝が太陽と月を運行させている、という神話的世界観

（八行文）の下、人々の行動を制約する規範が炎帝（天）から民に与えられた神聖な「下民之式」であり、それを遵守するか否かによって禍福が炎帝（天）から神を介して民に齎される、という基本論理（十三行文）に基づき、具体的な規範内容を月々の宜忌（辺文）として提示する史料である、と規定できる。また、このような楚帛書の作者あるいはその背景にある思想・観念を共有する「巫祝」集団は、「卜筮祭祷簡」に見える貞人集団や「日書」に代表される占卜書を用いて時日の吉凶を占っていた「日者」と根底的に同じ流れに属す宗教的職能者である、と考えられる。この第一章で考察した楚帛書の史料性格や数術関連資料との関係は、第二章から第五章までの各章で楚帛書の特徴的な要素を採り上げて個別具体的に分析していく際の基本的視座となっている。

第二章「楚帛書群の月名と数術関連資料における暦法の問題」

第二章では、楚帛書の辺題・辺文に見える月名と、それに基づいてこれまで議論されてきた暦法の問題について検討した。楚帛書の月名は『爾雅』釈天篇の月名と一致するが、他の楚簡などの紀年材料に常見する楚固有の月名（楚月名）とは全く異なるため、その背景にある暦法も楚月名を用いる暦法とは全く異なると従来考えられてきた。つまり、楚帛書の月名と暦法は楚系簡帛資料として最も異質な要素であり、それ故に時代や文化属性など楚帛書の史料性格に直接関わる重要な要素である。そこで、まず残帛書も含めた楚帛書群に三種類の月名が並存していることを起点として、従来定説のごとく見做されてきた楚帛書夏正説と、それに基づいて楚帛書の暦法が所謂「楚暦」と異なるとする楚暦の議論を再検討し、その前提となる『爾雅』釈天篇の月序に拠って「取」を正月歳首とする点に問題があり、成立し難いことを指摘した。そして、楚月名は用いられていないが、楚帛書の暦法も他の楚系簡帛資料と同じ「楚暦」であろうと推測し、楚帛書との共通性が認められる「日書」から「楚暦」の在り様がどのように見えてくるのか、楚月名を用いた各種の占卜における起点から検討し、「楚暦」が楚の四月「留辰」を歳首とする暦であると考えた。また、楚帛書で楚月名が用いられていない理由を整合的に説明できるような他の史料はまだ得られていないが、「卜筮祭祷簡」の貞人集団との比較から考え、楚帛書の「巫祝」

集団は本質的に楚国の政治権力とは一定の距離を保ち、楚国のシステムよりも自らの論理や固有の神々を重視するような、強い宗教性を堅持していた宗教的職能者であつたと想定した。

第三章「戦国楚における祝融像と伝世文献に見える祝融伝承」

創世神話的な楚帛書八行文に登場する「祝融」については、伝世文献中に関連する記述が散見し、『呂視春秋』十二紀や『礼記』月令篇では五行説に基づく配当から南・火・夏などの属性を与えられた神格として、また一方では『史記』楚世家や『国語』鄭語では楚の神話的祖先として周知されている。そのため、長沙という楚地から出土し、楚系文字で書かれた楚帛書の祝融も、楚の始祖伝承との関係を基に解釈されることが殆どであつた。言わば、この祝融は第二章で検討した月名や暦法とは全く対照的な、楚的要素の象徴とも言うべき要素の一つである。ところが、八行文の祝融には五行説による南の属性や楚王室との繋がりを明示するような点は全く確認されない。そうであるならば、この祝融を楚王室の神話的祖先とし、同時に五行説による南の属性を中国の南方に位置する楚に直結させるような従来の解釈は再検討を要する。そこで第三章では、まず楚帛書の祝融像を原文に即して解釈し、それと楚王室の神話的祖先として祭祀対象とされている「卜筮祭祷簡」の祝融との相違を明らかにした。それによれば、炎帝の命令を受けて四神を率いて下界に降り、天地を安定させる八行文の祝融は、従来言われてきたような楚王室の神話的祖先としての祝融ではない。何故なら、「卜筮祭祷簡」において祝融は確かに崇りを齎し、それ故に供犠供物を伴う祭祀を奉られる神格ではあるが、そのような「楚先」祝融を祭祀対象とするのは王室に繋がる墓主のために行われた卜筮祭祷に限定されており、そこには厳格な区別が存在しているためである。八行文に見える炎帝・祝融・共工という神々を一系の下に繋ぐ系譜が『山海経』海内経に見え、それが「江水」すなわち長江流域を伝承の場として、戦国楚においては、楚帛書に見えるような天地安定を齎す祝融伝承と、楚王室の神話的祖先とする祝融伝承との二系統の伝承が並存していたと考えられる。そこで次に、このような戦国楚における祝融の在り方から、『国語』鄭語に代表される楚の始祖伝承「祝融八姓」を

分析し、そこでは芈姓（楚）以外の、河南省を中心とする中原に分布する七姓は祝融との関係が必ずしも明確ではないことを指摘した。そのような中原の七姓と楚の芈姓とを結びつけている祝融の存在が問題となる。ここで、祝融八姓では楚の祖先の名が「重・黎」とされていて、「祝融」は彼らの称号に過ぎないこと、逆に「ト筮祭祷簡」ではそのまま「祝融」と記されていることに注目すると、祝融と重・黎とが同一視されるような要因、すなわち両者に共通するような神性にその問題を解く鍵があると考えられる。そこで、最後に、両者の結合を楚帛書の祝融伝承と重・黎の絶地天通との関係から検討し、次のような結論を得た。楚には、天と地の秩序ある分離というモチーフや神によって天と人が結ばれるという宇宙構造、それを支える宗教的専門家の思想などの面で重・黎の絶地天通と共通する楚帛書の祝融伝承と、楚の出自を説明する楚先祝融の伝承が並存しており、その二つの祝融伝承が中華世界の拡大に伴って中原に流入し、中原における重・黎の絶地天通に組み込まれる形で結びつくことによって『国語』鄭語に見られるような祝融八姓という楚の始祖伝承が形成された。また、それは中原諸国がその外に位置する秦や斉、楚といった新勢力の強大化を、堯や舜などの帝を補佐した祖先の存在から正当化しようとする、中原側の論理を背景とするものである、と。地域文化学の視点から言えば、この第三章は、楚文化という一地域文化が別の地域文化である中原文化に組み込まれていく過程の神話伝承レベルでの考察である。

第四章「楚帛書における“帝”の問題——天人相関の視点から——」

第三章では、楚帛書八行文に見える祝融伝承が、殆ど定説化しているかのような楚の始祖伝承でもなく、五行説を背景とするものでもなく、『山海経』海内経に見られるような長江流域に流布していたであろう別個の伝承であることを明らかにした。そうすると次に問題となるのが、同じく八行文に登場する炎帝の存在である。この炎帝についても、祝融とワンセットで『呂氏春秋』十二紀や『礼記』月令篇の五行説における五帝の一人である南方の帝と解釈され、それによって中国の南方に位置する楚との繋がりが議論されてきた。しかし、セットで論じられてきた祝融が五行説による五神の一人でないことが明らかとなり、そもそも楚帛書の炎帝は至上神として描

かれていることから、従来の見解には問題がある。そこで第四章では、この炎帝について天人相関の視点から分析し、それを楚・魯・斉を舞台とした早に関する三種類の故事、上博楚簡「東大王泊旱」・同「魯邦大旱」・『晏子春秋』内篇諫上の天人相関と比較した。それによれば、楚帛書の炎帝は有意思の人格神としての天と相互互換性を有し、神を介して災禍を人間世界に齎す存在であり、根底的に殷代の上帝および周代の天の延長線上に位置する「帝」である。このような帝の在り方は「東大王泊旱」に見える「上帝」も同様であるが、「魯邦大旱」・『晏子春秋』には「帝」そのものが一切見えず、天の人格神的性格も希薄である。ここに宗教性の濃厚な楚の文化的特徴を認めることができる。しかし、楚帛書では天（＝炎帝）が民の行為に感応するという非常に特異な天人相関が構築され、炎帝が災禍の警鐘として自ら太陽と月の運行を混乱させるという他に例のない要素も併せ持つ。このような天文現象の法則性に深く関わる炎帝は、時代は下るが同じ長沙で発見された馬王堆漢墓帛書「黄帝四経」の黄帝像と類似する。「黄帝四経」における黄帝への仮託が戦国楚ではなく斉においてなされたとする指摘を踏まえると、楚帛書に關与した「巫祝」集団は炎帝への信仰を核とする宗教的職能者であつたと推測される。

第五章 「五行説との関係から見た戦国楚の宗教的職能者」

第三・第四章で検討したように、楚帛書に登場する祝融および炎帝は五行説を背景とする五帝・五神の一人ではないが、八行文には明らかに五行説に基づくと思われる痕跡が認められる。そのため、楚帛書と五行説との関係は早くから注目され、これまで主として『礼記』月令篇に代表される時令関連の史料との比較において議論されてきた。一方で、その五行説は、睡虎地秦簡を始めとする秦漢時代の「日書」の中で最も多用されている占法原理として知られており、数術関連資料を検討する上でのメルクマールの一つとなる重要な要素である。そこで第五章では、まず残帛書を含めて楚帛書群と五行説との関係を分析した。それによれば、楚帛書における五行説の痕跡は時令類とは全く共通性のない八行文にしか確認できず、また残帛書の当時すでに一定程度整った五行配当が存在したと推測され、そこから、楚帛書の五行説は、その「巫祝」集団が神話的世界観に必要な四時・四方・

四色の配当を種々の五行配当から利用したに過ぎないことが見て取れる。十三行文や辺文に五行説が見えないことについては、「巫祝」集団はすでに十三行文において辺文の宜忌を炎帝から与えられる「下民之式」と位置づける基本論理を有しており、「日書」に含まれる占トが多く、占法原理とする五行説によって改めて宜忌を説明するよう必要はなかったと考えられる。一方、睡虎地秦簡「日書」の中の多くの占トが五行説と深い関連性を持ち、その循環理論と五行配当が占法原理として明確に位置づけられており、陳偉氏が指摘されるように、現段階で最古の「日書」である九店楚簡「日書」にもその原形を確認することができる。占トのマニユアルとしての「日書」に楚帛書のような基本論理や世界観は記されていないため、断定は難しいが、それには恐らく宗教性の希薄化と五行説の普及が影響していると想定した。また「卜筮祭祷簡」に五行説の痕跡が認められないのは、貞人集団が基本的に筮占・亀卜の二種類の占法によって封君や大夫などの需要に対応していたことを示している。このように、戦国楚では、本質的に民を対象とする楚帛書の「巫祝」、宗教性が希薄で、五行説を占法原理として活用していた「日者」、そして楚国のシステムの影響下で比較的高位の支配者のために占トを行っていた貞人集団、という少なくとも三種類の異なるタイプの宗教的職能者が存在し、幅広い階層の人々を対象とする占ト・祭祀を担っていたことを明らかにした。

終章 「子彈庫楚帛書群と戦国楚の文化・習俗」

終章では、まず第一章で考察した楚帛書の史料性格を基本的視座として、第二章から第五章までで個別的に検討してきたことを整理した。それによれば、楚帛書は、炎帝を宇宙の絶対的主宰者として信仰する「巫祝」集団が種々の宜忌を、その特殊な天人相関の体系の中で炎帝から与えられる「下民之式」と位置づけて広範な社会層へ提示したものである、とすることができる。この種の宗教的職能者の論理や觀念が従来の伝世文献や「卜筮祭祷簡」・「日書」に記されることは殆どない。各章で析出された楚帛書の特徴が多くそのような論理や觀念と密接に結びついていることを踏まえると、それを直ちに楚地の文化・習俗の特徴として考える前に、まず楚帛書に

関与した「巫祝」集団固有の特徴として把握しておく必要がある。その上で、考古学的な状況証拠と、炎帝・祝融という神格の長江流域との関係などを考え合わせるとき、初めてこの「巫祝」集団が戦国楚で活動していた様々なタイプの宗教的職能者の一つであると理解される。そこで次に、このような楚帛書と「巫祝」集団が、ほぼ同時期の「卜筮祭祷簡」およびやや遅れて出土するようになる「日書」とどのようにリンクするのか、という問題について、「卜筮祭祷簡」と「日書」の出土状況・戦国期の長沙の状況・秦家嘴楚簡「卜筮祭祷簡」の分析から考え、戦国楚の社会状況を次のように想定した。戦国楚には、封君や大夫などの比較的上位の支配層が定期的に、また臨時的に真人集団を招いて占卜・祭祀を行う卜筮祭祷という特徴的な習俗があった。これと同時に並行的に、士や庶人といった下位の社会層も日常的に占卜との深い繋がりを持ち、その制約の下で行動していた、と。ここで、楚帛書辺文の宜忌や「日書」の形式に着目し、それらは占卜に関する専門知識を持たない士や庶人が自ら時日や特定の行為の吉凶を判断するためのマニュアルとして生まれたと推測した。但し、楚帛書群は、マニュアルだけでなく「巫祝」集団の世界観や論理をも併記する点に「日書」との決定的な違いがあり、その宗教性の強さに由来するものである。このように各社会層と密接に結び付いていた楚地の宗教的職能者と習俗は、前二七八年の白起による拔郢によって、楚の上位の支配層と真人集団に支えられていた卜筮祭祷や「卜筮祭祷簡」を副葬する習俗が消滅したが、下位の士や庶人が日常的に時日や行為の吉凶を判断し、行動するような習俗は統治主体が異なっても残った。しかし、楚帛書に示されたような宗教的職能者の論理は、統一王朝側の統治理論の「法」と本質的に対立する可能性を含んでいるため、宜忌・禁忌だけを記したような「日書」は秦漢墓からも発見されるが、楚帛書のようなものは継承されなくなる。ここにも楚帛書群と「日書」の相違が如実に表れている。睡虎地秦簡や張家山漢簡「二年律令」には、そのような楚地の宗教的職能者に由来する習俗への統一王朝の対応を見ることができ、それが最終的に『漢書』地理志下のような記述に結実したと考えられるのである。